『東京大学言語学論集』**43** (2021.10) 247-257

〈属性〉は物語を開くのか

佐藤らな
ranasato877@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

キーワード：属性　もの　名詞　形容詞　プロトタイプ　百科事典的意味観

要旨

本稿は、言語を通して〈もの〉や〈属性〉を我々はどのように捉え、どのような知識として持っているのかを考察する。そして〈属性〉に関する知識は〈もの〉のそれと何が異なるのか、またどのように関係しているのかを考える。〈属性〉に関する知識は〈もの〉に関する知識と同様に、言語の使用に基づき豊富な情報を有するが、〈もの〉と〈属性〉は自立的か非自立的かという点で異なり、その知識の積み重なり方が異なることを主張する。

1. はじめに[1]

ある一匹の猫が目の前にいることを想像していただきたい。その猫はメスである。その猫の色は基本的に白くて、灰色と黒のぶち模様があり、しっぽは灰色と黒の縞模様である。耳と肉球はピンクである。今年で 5 歳になり、とてもかわいい。その猫はいつも「ばなな」という名前で呼ばれている。つまり、ばななは白いし、かわいいし、猫だ。ある個体（もの）が持つ様々な側面はその個体の〈属性〉である。わたしたちはある個体（例えば、「ばなな」）の属性について描写（説明）するときに形容詞に限らず様々な語を用いることができる。

これまで多くの文献で百科事典的知識やプロトタイプ（cf. 第 2.1 節）について語るとき、主に名詞を例にあげてその属性を描写する形で説明されてきた。典型的な猫はよく寝て、典型的な鳥は飛び、典型的な果実は生で食べられ、などの知識と結びついているということが語られてきた一方で、典型的な「高い」や「愚か」がどのような百科事典的知識と結びついているかは語られることはほとんどない。Taylor（2003:64 辻ほか訳 2008: 107）は「（多かれ少なかれ）典型的な「臆病」と呼べる出来事はあるだろうし、（多かれ少なかれ）典型的な「高さ」という性質を持った対象物はあるだろう。しかし、ある出来事を「臆病」のプロトタイプと呼ぶことはできないし、ある対象物を「高さ」のプロトタイプと呼ぶことはできない」と述べている。このようにある事例を形容詞のプロトタイプとして語ることには困難がある。しかし百科事典的な意味観をとる場合、形容詞であっても百科事典的な知識、プロトタイプがあるということは前提とされる。ではなぜ形容詞のプロトタイプについて語ることには困難さがあるのだろうか。

[1] 本研究は JSPS 科研費 21J13661 の助成を受けたものである。

本稿は、名詞や形容詞を用いて表される〈もの〉や〈属性〉を我々はどのように捉え、知識として持っているのかについて考察する。具体的には、〈属性〉に関する複雑なネットワーク的知識（「典型的な物語」（野矢 2011））の存在を考える。さらに、〈属性〉に関する知識は〈もの〉のそれと何が異なるのか、またどのように関係しているのかを明らかにする。

次の第 2 節では百科事典的知識および典型的な物語について概説する。第 3 節では〈もの〉と〈属性〉の捉え方についての先行研究をみる。第 4 節では属性に関する知識のありかたについて述べる。第 5 節では〈属性〉の「典型的な物語」とはどのようなものかを考える。

2. 知識の総体としての百科事典的知識、典型的な物語

この節では、認知言語学における百科事典的意味観、並びに類似する議論である「典型的な物語」（野矢 2011）について概説し、人が言語表現を用いるときに参照する「知識」について概説する。

2.1. 百科事典的意味観

伝統的に言語学で研究対象となる「意味」は、文脈や状況などの情報から切り離された「言語内在的な意味」のみであると考えられてきた。意味に対するこのような考え方は比喩的に辞書的意味観と呼ばれる（Langacker 2008: 38）。図 1 の大きな円は言語使用者が指示対象に関してもっている知識の総体を表しており、(a) の太い線で描かれた四角は当該の語彙項目を構成する言語内在的な意味を表している。この言語内在的な意味は、コンテクストから独立した基本的な意味素性のみによって構成されている。例として（1）（2）を（ごく単純化した形で）辞書的意味で解釈してみる。

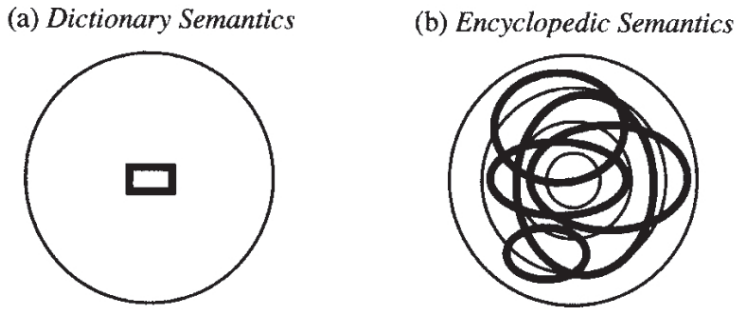

図 1．辞書的意味と百科事典的意味（Langacker 2008: 39）

（1）　バッハは愚かだ。

（2）　バッハは愚か者だ。

（1）では、「バッハ」[2]は人間の男性の名前であり、人間の男性である対象には[人間][男性]とい

[2] J.S.ミルを代表として「固有名詞はいっさい内容を持たず、意味をもたない」ということがしばしば主張され

う素性を帰すことができる。そしてその対象に[愚か]という素性が属性として帰されていることがわかる。(2) では、同様にバッハ（[人間][男性]）に愚か者（[人間] [愚か]）という属性が帰されている。つまりバッハにはどちらにも、[人間][男性] [愚か]の三つの素性があるということを表していることとなり、素性を比べた限りでは意味的に違いがないことになる。

一方、認知言語学が一般的にとる意味観は比喩的に「百科事典的意味観」と呼ばれるものである（Langacker 2008: 39）。この意味観をとる認知文法では、「語の意味とは、ある事物について我々が持つ無限とも言える様々な知識に対して特定の仕方でアクセスすることによって喚起されるもの」（坪井 2020: 22）とされている。つまり、辞書的意味だけではなく、いわゆる言語外的な知識も含めた知識の全体が、ある表現の意味として用いられると考えている[3]。さきほどの（1）（2）の例について、どちらの例にも[人間][男性] [愚か]の三つの要素が含まれることは認められるがそれが百科事典的意味観においてとらえる意味のすべてではない。「バッハ」という人物に関する知識には、人間や男性であること以外にも顔の形が丸いことや、ある国際組織の会長であることなど（会話の参与者が知っている限りにおいて）様々な知識が文脈によって喚起される[4]。

百科事典的意味観において、ある表現によって慣習的に喚起される知識は、中心性を帯びていると考えられる。ある表現に関する知識というのは、語彙項目が使用される毎にその文脈などを含んだ情報が積み重なりできあがっていくものである。そして、ある表現を用いたときに同じような情報が繰り返し含まれるとき、その情報はより強く定着しその表現の中心的内容となっていく。一方で、特殊な内容が含まれている場合は、特定の場面でしか用いられない。しかしこのような内容も周辺的な内容として知識に含まれる。このようにして、ある表現を使用したときに喚起される内容には中心性が生まれる。図 1（b）はそのような知識を図式化したものであり、同心円状に連なっている円はこの中心性を表している。図 1（b）の太い楕円は、ある使用においてそれぞれ知識の総体のうちどのあたりが喚起されているのかを表している。言語表現の意味が百科事典的であるといっても、知識全体を毎回フル稼働させるということではないし、中心的な情報でさえ常に喚起されるというわけではない。図 1（b）で楕円それぞれが様々な形や大きさをしているように、ある場面で使われる表現というのは全く同じではなく、それぞれがどこか独自の内容を持っている（Langacker 2008: 39）。そして、それらの使用の積み重ねにより、知識体系ができあがっていくのである。

2.2. 典型的な物語

前節である表現の知識には中心性がみられることを述べた。その知識の中心に位置するもの

るが（立川・山田 1990: 100ff.）、本稿では固有名に関する議論には踏み込まない。

[3] 野村（2013: 300）は「認知言語学では、意味はことばに内包されたものではなく、言語使用者が心の中で様々な知識を動員して構築するものであり、ことばはそうした知識体系へのアクセスポイントにすぎないと考える」と述べている。

[4] もちろん「バッハ」という同一の音で呼ばれる人物だとしても、(1) の「バッハ」はある国際組織の会長を指し、(2)「バッハ」は近所のパン屋で働いている人物を指示しているといった場合、参照する知識はそれぞれ（全くといっていいほど）異なることとなる。

は「プロトタイプ（典型）」と呼ばれる。この「プロトタイプ」という用語で理解される内容にはいくつか種類がある。Taylor（2003: 63f.）は、三つの種類の「プロトタイプ」を説明している。一つ目は、プロトタイプが事例として実在するという理解である。例えば、目の前にあるカップがまさにカップらしいカップであるような場合にそのカップ自体をプロトタイプと呼ぶならば、それは「事例としてのプロトタイプ」である。二つ目は、「下位カテゴリーとしてのプロトタイプ」である。これは、あるカテゴリーに、下位カテゴリーとして中心的なメンバーと周辺的なメンバーがある場合、前者をさす用法である（cf. Rosch 1973）。例えば、アメリカではムクドリが、日本ではスズメが鳥カテゴリーの中心的メンバーと見なされる。一方、ペンギンはそれらと比べると周辺的なメンバーである。この違いは言語表現に反映される（坂原 1998: 95）。坂原によると、英語のカテゴリー所属を表現する文で、中心的なメンバーに対してはヘッジ表現である par excellence などが用いられる。(3)（4）の例から、ムクドリにこのヘッジ表現を用いることは自然であるが、ペンギンに対しては不自然であり、ペンギンは中心的メンバーであるとは言えないことがわかる[5]。

（3）　A robin is a bird par excellence.　　（坂原 1998: 95）
（4）　?A penguin is a bird par excellence.　（ibid.）

そして、三つ目が「抽象概念としてのプロトタイプ」である。Taylor（2003:64 辻ほか訳 2008: 107）は、「このアプローチに基づけば、ある特定の対象物はプロトタイプそのものであるわけでなく、プロトタイプを具現、ないし例示していることとなるであろう。また、あるカテゴリーの概念的「中心」を捉えてはいるが、いかなる具体例や下位カテゴリーとも結びつけられない、さらに抽象的なプロトタイプ概念を考えることもできる。これは抽象概念としてのプロトタイプという見方である」と述べている。この三つ目のプロトタイプの見方を推し進めるものとして、野矢（2011）は、抽象概念としてのプロトタイプを「典型的な物語」と呼ぶことを提案している。野矢（2011: 403）は「プロトタイプとは、いわば概念的に構成された抽象的なものなのである」と断言している。

野矢（2011: 411f.）は、単に属性の集合としての概念では不十分であることを強調し、「「プロトタイプ」と言わずに「典型的な物語」と言うことによってより全体論的な含みが出てくると思われる」と述べる。少々長くなってしまうが該当箇所を以下に引用する。

> ある概念にまつわる通念を語り出すとき、そこに登場する他のものたちもまた、プロトタイプとなる。例えば、ふつうの犬はふつうの人に飼われている。典型的な物

[5] 西村・野矢（2013:73）において「認知言語学の考え方だと、たんにあるものを鳥か鳥じゃないかを区別できるだけではなくて、スズメは「いかにも鳥らしい」けれどペンギンは「鳥らしからぬ変な鳥だ」といった判断ができないと「鳥」という言葉の意味を理解していることにならない」と言及されていることからもわかるように、そもそも、典型的な事例の判断は、ここでいう「抽象概念としてのプロトタイプ」（典型的な物語）に基づいていると言える。

語の中では、犬がプロトタイプであるならば、飼い主もプロトタイプ（ふつうの人）である。われわれはそこでいっさいの個性を剥ぎ取られた純粋に概念レベルの普遍的な物語を語り出す。そこでは、概念同士は論理的な関係よりもゆるい、通念レベルでつながりあい、その連関はさらに波及して広がっていく。ふつうの犬を飼っているふつうの人は、ふつうの生活を送っている。そこでふつうの人のふつうの物語が開けてくることにもなる。あるいは、ふつうの犬は、ふつうのエサを食べる。ふつうのエサの多くはふつうのペットショップで売られている。そしてそこにはふつうの店員がいる。こうして、典型的な物語は芋づる式に、というよりも竹林の根のようにあらゆる方向へと伸び、網目状に絡み合うものとなるのである。それゆえ、典型的な物語は全体として世界全体を語り出すものとなる。もちろんそんな全体を語り出すことは実際には無理であるから、もしそれを表立って語り出そうとしたならば、手の届く範囲にスポットライトを当ててその一部だけを語ることになるだろうが、われわれが暗黙のうちにもっている概念了解のレベルで言うならば、ある概念が開く典型的な物語は世界全体に広がっているのである。（野矢 2011: 412）

野矢が想定する典型的な物語はまさに、百科事典的知識における中心性の階層、そして、図 1（b）の太い楕円が示していたような知識の用いられ方と重なるものである。野矢自身、西村・野矢（2013:85f.）において百科事典的意味論とプロトタイプ意味論は出発点が異なるだけで行きつくところは同じだとみている旨を述べている。

本稿では、百科事典的知識とは言語表現を使用するときに用いられる知識の総体であり、典型的な物語から語りだされるような中心性を備えたものであると考える。その知識や情報は概念同士のネットワークをなしている。そして、この知識ネットワークを作り出すのは我々の言語使用に含まれる文脈、状況、世界の見え方などすべての情報の積み重ねである。

3. 〈もの〉として捉えることと〈属性〉として捉えること

本稿の目標ははじめに述べた通り、〈属性〉に関する知識のあり方を説明することである。そのためには、〈属性〉とはどういうものなのかを位置付ける必要がある。本節では、池上（1978）と Langacker（2008）を中心に〈もの〉や〈属性〉に関連する品詞の規定を提示する。

3.1. 品詞でとらえる意味、意味でとらえる品詞

これまで、品詞の区分を意味に基づいて決定しようとすると様々な問題が出てくることが指摘されてきた（池上 1978: 172）。例えば、「名詞」は〈もの〉、「動詞」は〈行為〉、「形容詞」は、〈属性〉をそれぞれ表すのだというように規定したところで、例えば「疾走」とか「投球」は〈行為〉であるが、「動詞」でなく「名詞」であり、同じように「美しさ」とか「悪」は〈属性〉を表わしてはいるが、「形容詞」ではなく「名詞」であるなどの例外はたくさん見られる（ibid.）。池上（1978: 173）は、形態・統語（表層）による品詞の区分と意味（深層）による区分は異な

るレベルの分類であることを述べた上で、その間の対応関係をみている。

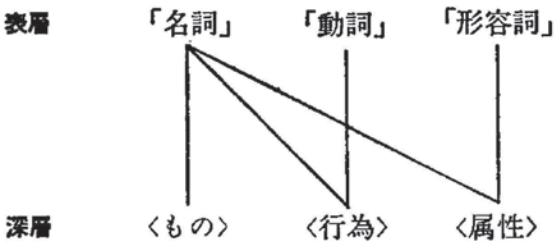

図 2. 表層と深層の対応関係（池上 1978: 173）

池上は「名詞」「動詞」「形容詞」にしぼって、〈もの〉〈行為〉〈属性〉との対応関係を図 2 に表している。〈属性〉についてのみ注目すると、池上が述べている範囲では〈属性〉は（表層での）形容詞でも名詞でも提示することができると考えられる。池上（1978: 173）は「〈属性〉や〈行為〉は本来何かについての属性や行為であり、何らかの〈もの〉を予想する」と述べる。さらに、〈属性〉が名詞で表される場合と、形容詞で表される場合との違いについて、本来〈もの〉ではない〈属性〉を名詞として表現することは、それらを比喩的に〈もの〉として提示することだと言え、その結果、自立したものとして捉えられると述べている（ibid.）。

類似する主張として、認知文法（Langacker 2008 他）における品詞の規定がある。ごく簡潔に言うと、名詞はモノを焦点化（プロファイル[6]）し、名詞以外の品詞は関係をプロファイルするものとして区別される（図 3）。関係を焦点化するものをさらに分類する基準として、時間的な関係（process）なのか、非時間的な関係（non-processual relation）なのかが重要な役割を担う。この分類に従うと、動詞は時間的な関係を焦点化し、形容詞や副詞などは非時間的な関係を焦点化する。そして、非時間的な関係のうちでトラジェクターがモノとなる関係をプロファイルするのが形容詞だとされる[7]（Langacker 2008: 98f.）。一方、名詞とはモノ化（reification）の産物

[6] 認知文法では、ある言語表現の意味の成立の基盤となるような概念はベース（base）と呼ばれる。ある言語表現はベース内の特定の構造をある種の焦点（focus of attention）として選び出す。この焦点化される特定の構造がプロファイル（profile）であり、これが言語表現の概念的な指示対象を指定するものである（Langacker 2008: 66）。例えば、「斜辺」は、直角三角形を同時に想定しなければ説明できない。斜辺は直角三角形の一部でなければただの線分でしかなく、焦点があたる対象は「斜辺」であっても、直角三角形の全体が背景として機能しているのである。直角三角形をベースとして、その一部をプロファイル（焦点化）することで「斜辺」という概念を捉えることができる。

[7] 形容詞が非時間的な関係を表すと考えることの妥当性は、日本語の形容詞の活用の仕方からも窺い知ることができる。北原（2010: 17）は、日本語の形容詞の本活用に未然形が存在しないことについて、「形容詞は物事の性質、状態や感情・情意を表すが、これらは時間と関係ない、いわば超時間的な概念である。それに対して未然形は、その名が示す通り、まだそうでないという、時間にかかわる意味を表わす場合に用いられている形である。したがって形容詞（だけでなく形容詞活用形の助動詞）の本活用には未然形があってはおかしい」と述べている。北原（2010: 16f.）では言い切りの形が古語で「-し」であり、連用形が「-く」となるものをク活用、連用形が「-しく」という形になるものをシク活用と呼ぶ。これが本活用である。別に、連用形「-く」「-しく」に「-あり」がついて熟合した「-かり」「-しかり」の形は「あり」の活用であって形容詞本来の活用ではないと述べられている。

であり、モノとは「ひとまとまりをなすもの」（野村 2014: 115）と言い換えることができる。例えば、英語の yellow という語は、名詞としても形容詞としても動詞としても用いられるが、どの品詞で用いられるのかによって焦点化される対象が異なる。（Langacker 2008: 102f.）。

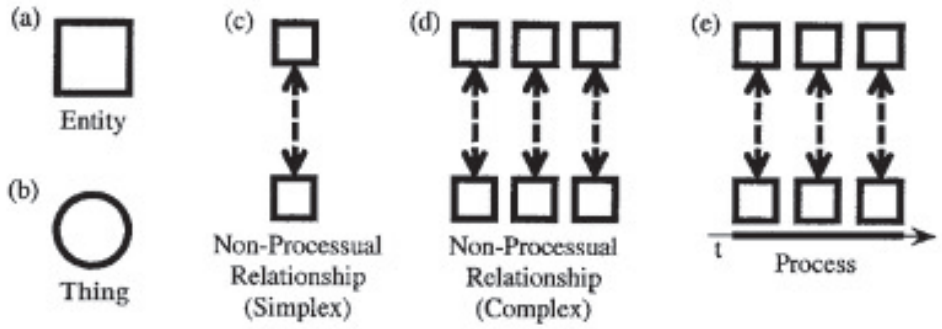

図 3. 品詞分類のための概念（Langacker 2008: 99)

3.2. 述語名詞の捉え方

yellow のように名詞としても形容詞としても用いられるということが（慣習的に）意識されやすい語は上記の説明で納得ができるだろう。しかし「ばななは猫だ」ではどうなるだろうか。たとえ「猫」が属性を表すことがあるとしても、「猫」は形容詞ではなく、名詞だと言いたくなるのではないだろうか。このように名詞が述部の重要な一部として機能しているとき、その名詞は述語名詞（predicate nominative）と呼ばれる（Langacker 1991: 64）。Langacker（1991: 66）は、名詞が述語名詞として機能する場合は、〈もの〉をプロファイルするのではなく、関係をプロファイルするように拡張されているのだと述べている。図 4 の左は基本的な用法の名詞の意味を表し、破線の矢印で拡張を表している。右側が述語名詞を表したものであるが、そのプロファイルは太い点線で表された関係であり、名詞の持つ意味内容（X）が引き継がれていることが細い点線で表現されている。

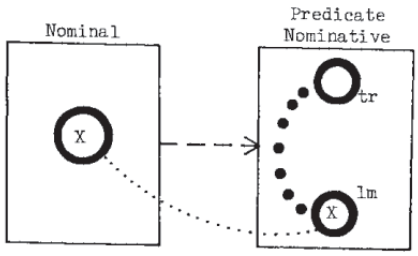

図 4. 名詞から述語名詞への派生（Langacker 1991: 66）

このような考え方を採用すると、属性を述べる表現は、形容詞であれ述語名詞であれ、関係をプロファイルしていると言える。

4.　属性に関する知識のありかた

前節で、〈もの〉と〈属性〉の違いは捉え方の差に還元されることをみた。この節では、一般的に〈属性〉として用いられる語とそうではない語の違いについて検証する。

4.1.　結びつく個体と〈属性〉

ある名詞が派生的に関係をプロファイルし何らかの〈属性〉を説明するものとして機能したとしても、一般的に名詞として分類されるものと形容詞として分類されるものには何らかの違いがあることは明らかである。

形容詞、普通名詞、固有名詞の違いについて、立川（2020: 217）はイェスペルセンの「特殊化」という概念のもと、固有名が最も特殊化されており、形容詞が最も特殊化されておらず、普通名詞がその中間であるという主張をしている。立川は、図 5 において、より多数の属性とむすびつく唯一の個体が固有名詞であり、一つの属性に対して最多数の個体が結びつくのが形容詞であることを示している。

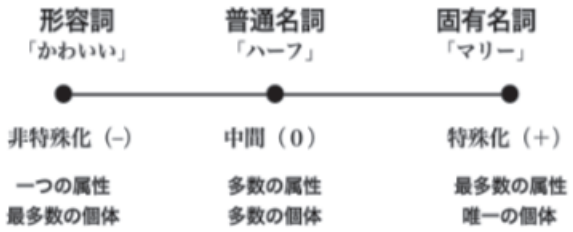

図 5. 立川（2020: 217）が提示する連続的な関係

立川（ないしイェスペルセン）の主眼は固有名詞の豊かな意味内容にあり、形容詞についてはほとんど直接言及されていないが、立川（2020:217）が引用している以下のイェスペルセンの記述は形容詞（または〈属性〉）について考える上で興味深いものである。

> 私は形容詞の場合一つの性質を抽出するのに対して、実詞（＝普通名詞）ではそれが表示する諸性質の複合性のより大きい点をむしろ強調したいと思う。この複合性は非常に重要なものであり、形容詞に形容詞を積み重ねてゆくことによって、実詞の喚起する概念の完全な定義まで到達することができるのは、極めて稀な場合にすぎず、そこには常に、（中略）或る定義しえないX、すなわちそれまでに挙げてきた諸性質の”持ち主”と考えられる核体がのこるであろう。
>
> （『文法の原理』半田一郎訳、岩波書店、1958 年 80 項）

イェスペルセンの主眼は、名詞が表す内容があらゆる性質をもちいて説明したところで語りつくせないことであるが、これは同時に、形容詞は、彼がいうところの”持ち主”がいなければ語

ることができないことを示している。

〈属性〉は常に何かに属するものであり、常に持ち主がいる。〈属性〉について説明を試みても、それがいつのまにか属性が属する〈もの〉の説明になってしまう。なぜなら、多くの場合、焦点が当たるのは持ち主のほうである。例えば、「赤いリンゴ」は、リンゴが焦点となるし、「バッハは愚かだ」はバッハについて語っている文である。〈属性〉は主役になれないのである。そして、これこそが〈もの〉と〈属性〉の知識のあり方の違いであると考える。また、この違いが名詞もしくは形容詞として扱われる語の違いとして表れる。

5. 〈属性〉が開く物語とは

前節で述べたことが正しければ、名詞が提示する〈もの〉は自立的であり、直接焦点が当たる対象になることができ、より説明しやすいこととなる。しかし、説明しがたいからといって、〈属性〉についての知識、典型的な物語について語れないということはない。ただその語り方、そして知識の積み重なり方が異なるのである。

例えば、「ほろ苦い」や「甘酸っぱい」と聞いたら少し悲しい恋愛を想起しやすい。「甘酸っぱい」の物語には、ふつうのイチゴが登場し、ふつうの初恋が終わりを告げ、ふつうの思い出として色あせないまま残っているだろう。そこには常に「甘酸っぱい」結びつくなんらかの〈もの〉が登場する。属性の物語であっても、使用の積み重ねによって紡がれていき、当然そこには中心性が生まれる。例えば、「赤い」といえばリンゴやバラは思い付きやすい。一方で、はさみの持ち手や本の帯は赤いことが不自然ではないとしても、「赤いもの」について考えた時の典型例にはならない。または、「愚か」や「馬鹿」について考えてみても、どんな風に愚かなのか、どうしてそれを馬鹿と特徴づけるのかには様々な状況や理由があるだろう。この二つの語はよく似ており、交換可能な場合もあればそうではないときもある。例えば、「愚かなことをした」と「馬鹿なことをした」であったら、前者のほうが深刻な感じがする。恋人に対して「馬鹿」と罵ることはあるが、「愚かだ」と罵ることはあまり想像できない。これはそれぞれの意味が、使用の蓄積によって形作られ独自の物語がある証拠である。

先に提示した次の例についてもう一度考えてみたい。

(1)　バッハは愚かだ。
(2)　バッハは愚か者だ。

本稿の立場では、「愚か」と「愚か者」は異なる物語を開くと考える。この文で伝えたいことは類似しているとしても、それぞれがこれまで使われてきた履歴は明らかに異なる。イェスペルセンが述べたように、名詞には多様な属性を見ることができる。その中の一つに、そして重要な要素として「愚か者」には「愚か」がある。一方で、「愚か」の背景にあるのは、「愚か」の持ち主になった者たちの記録である。「愚か」と「愚か者」では、「愚か」の物語には愚か者が登場する、もちろんほかにも愚かな人間も登場するし「愚かなことをしてしまった」と後悔す

る殺人犯も登場する。「愚か者」は人が「愚か」の持ち主になった時の一つの例である。そして「愚か者」には愚か者の物語がある。愚か者は「愚か」以外の様々な属性でも特徴づけることができるが、「愚か」が結びつくことができるような対象はその物語に必ずしも登場しない。どのような個体に属するのかという多様性は形容詞の物語のほうが多く持ち合わせている。

〈属性〉の物語は、常にわき役として蓄積されていく。何と結びついたかという記録、内容が蓄積され、例えば、形容詞（e.g. ほろ苦い）が名詞化（e.g. ほろ苦さ）したときに、つまり、焦点を〈属性〉が持っている内容に移したとき、これまで持ち主になったものたちとの記録を、背景として喚起できる。ただし、当然なにかを修飾、記述するとき焦点化されるのはモノのほうであって、属性だけの物語を語ることには困難があり、なかなか意識されづらいのである。

参考文献

池上嘉彦（1978）『意味の世界　現代言語学から視る』東京: 日本放送出版界.

坂原茂（1998）「認知的アプローチ」郡司隆男, 阿部泰明他『岩波講座 言語の科学 4 意味』83-124. 東京: 岩波書店.

立川健二（2020）『言語の復権のために ソシュール、イェルムスレウ、ザメンホフ』東京: 論創社.

立川健二・山田宏昭（1990）『現代言語論　ソシュール　フロイト　ウィトゲンシュタイン』東京: 新曜社.

坪井栄治郎（2020）「認知文法」坪井栄治郎・早瀬尚子（著）『認知文法と構文文法』2-119. 東京: 開拓社.

野村益寛（2013）「百科事典的意味論」辻幸夫（編）『認知言語学キーワード辞典』300 東京: 研究社.

野村益寛（2014）『ファンダメンタル認知言語学』東京: ひつじ書房.

野矢茂樹（2011）『語りえぬものを語る』 東京: 講談社.

西村義樹・野矢茂樹（2013）『言語学の教室』東京: 中央公論新社.

Jespersen, Otto（1924）*The philosophy of grammar*. London: George Allen and Unwin. [半田一郎訳（1958）『文法の原理』東京: 岩波書店.]

Langacker, Ronald. W.（1987）*Foundations of cognitive grammar. Vol. 1: Theoretical prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald. W.（1991）*Foundations of cognitive grammar, vol. 2*, Descriptive application. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald. W.（2008）Cognitive grammar: A basic introduction. New York: Oxford University Press.

Rosch, Eleanor. H.（1973）Natural categories. *Cognitive Psychology,* 4(3), 328–350.

Taylor, John R.（2003）*Linguistic categorization*. New York: Oxford University Press. [辻・鍋島ほか訳（2008）『認知言語学のための 14 章』東京: 紀伊國屋書店.]

What It Means for Something to Be an Attribute: A Cognitive Perspective

Sato, Rana
ranasato877@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Attributes, Nouns, Adjectives, Prototypes, Cognitive grammar

Abstract

This paper examines how we perceive “things” and “attributes” through language, as well as what kind of knowledge we have about them. I argue that while our knowledge of “attributes” is as rich in information based on language use as our knowledge of “things,” the two types of knowledge differ in terms of whether they are autonomous or non-autonomous, resulting in the different ways they are accumulated.

（さとう・らな　東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員）